

福井県内科医会学術講演会 令和5年7月15日（土）開催

プライマリーケア領域から始まる、新たなCOPD治療
～漢方薬による治療アプローチの展望と期待～

7月の学術講演会は、岐阜県から大林浩幸先生をお迎えしお話し頂く予定であったが、先生の急な御用事でWebによる講演となった。しかし、COPD治療に対する熱情溢れるマシンガントーク的御講演は迫力満点で、短時間のうちにCOPDの診断から治療にわたる最新の知見を拝聴する事が出来た。

先生は「COPDの年間死亡者数は、気管支喘息患者の死亡者数の15倍以上であり、その数からも、COPDは臨床現場で決して看過できない、重要な呼吸器病である。喘息と同様に、COPDでもガイドライン治療が診療現場に広く普及し、炎症病態の違いから第一選択薬の差はあるが、いずれも吸入療法が主軸である。気管支喘息とCOPDの死亡者数の大差は、治療薬のレベル以前に、大きな盲点が少なくとも2つ潜むのではないかと話され、30余年に及ぶ臨床学術研究の御成果を披瀝して下さった。第一の盲点は診断率の低さによる治療の出遅れで、集団検診を利用したスパイロメーターによる診断を勧められた。第二の盲点は、COPDには生活習慣病をはじめとする様々な併存症があり、併存症数が多いほど生存率が低くなる。COPD治療は、呼吸器疾患のみならず、全身的視野をもって患者を診るべきで、特にCOPD増悪に直接的に影響し、臨床的に非常に重要にもかかわらず認識されてこなかった疾患として「フレイル」と「サルコペニア」を挙げられ、「これらの疾患への積極的介入がCOPDによる死亡者数減少に繋がるのではないかと考える。COPD 1～2期の患者にとって、リハビリテーション導入に先行し、あるいはその代替となる薬物療法として人参養栄湯を用い、COPD 3～4期の患者には、患者の体力や気力、免疫力、さらに生命力を向上させる治療介入法として人参養栄湯を用いるのが良いのではないかと話された。人参養栄湯は北宋時代の「和剂局方」を原典とする漢方薬で、古来、呼吸器症状を供う慢性消耗性疾患の妙薬とされてきたが、大林先生は「人参養栄湯の十二種の生薬のうち、五味子は筋量を増加、持久力とエネルギー代謝を向上させ、止咳・化痰作用により身体的フレイルおよび呼吸機能を改善する。遠志は止咳・化痰作用と共に精神安定作用・抑うつ作用を有し、精神的フレイルにも有効である」と述べられた。西洋医学と共に東洋医学を併用する事がCOPDの予後改善に有効である事を、先生の御講演を通じて学ぶと共に、患者さんの予後改善のためには、寸暇を惜しんで多方面の勉強をするのが医師の使命である事を改めて認識させて頂いた有難い講演であった。

（吉村医院 吉村 信）